

ジャンマリア・オルテスについて

——その予備的研究——

藤 井 盛 夫

I はじめに

これまで筆者が指摘してきたように [9-12], イタリアの近代経済学者マッフェオ・パンタレオーニ, ヴィルフレド・パレート, エンリコ・バローネ, ピエロ・スラッフアの著作には, ①科学としての経済学の認識, ②多生産物・多産業の体系, ③価値尺度の追求, ④自己補填の状態, ⑤循環的構造, ⑥生産係数の可変性, ⑦逐次的近似の接近方法という七つの項目からなる一つの共通の枠組みがあり, それを「イタリア近代経済学の伝統」と呼んできた。しかしながら, 確かにスラッフアは経済学者としてデビューした 1925 年のイタリア語の論文「費用と生産量の関係について」においてバローネ・パレート・パンタレオーニに言及し, 引用しているし, バローネは 1908 年の『経済学原理』においてパレートに謝辞を述べているし, パレートは 1896 年の『経済学講義』と 1906 年の『経済学提要』においてパンタレオーニに謝辞を述べているけれども, だからと言ってパンタレオーニの主張がパレートに受け継がれ, パレートの主張がバローネに受け継がれ, パンタレオーニ・パレート・バローネの主張がスラッフアに受け継がれているとは言い切れない。それゆえ, 「伝承」の意味にとられかねない「伝統」と呼ぶのは適切ではないであろう。また, 上述の④自己補填の状態が確認できるパンタレオーニの 1889 年の『純粋経済学原理』中の箇所の一つは, ジャンマリア・オルテスの 1774 年の著作からの引用であるから, もしオルテスにも上述の項目が見出され

るのであれば, 「イタリア近代経済学」と呼ぶのもやはり適切ではないであろう。もしオルテスにも上述の項目が見出されるのであれば, イタリアの経済学は, 少なくとも 18 世紀から 20 世紀にかけて, 共通する七つの要素からなる共通の構造を持っていると言うべきであろう。以後, それを確かめるためにオルテスの著作を検討していくが, オルテスについては, 同時代のフェルディナンド・ガリアーニが効用主義の先駆者として高く評価されていることもあって, どちらかと言えば影の薄い存在であるし, マルサス人口論の先駆者として人口論関係で名前が挙がる程度なので, オルテスの経済理論について(ましてパンタレオーニ・パレート・バローネ・スラッフアとの関連については)体系的に研究が継続されているようには思われない。そこで, 本稿ではオルテスの著作を検討するに当たって, その準備としていくつかの点を整理しておきたい。それは, いまだにオルテスの正確な生没年月日が知らされていないこともさることながら, 著作の理解に不可欠とされるオルテスの経歴や周辺環境が十分知らされていないからである。

オルテスの経済理論についての先行研究には, 邦語文献としてブスケー『イタリア経済学抄史』[3]と堀田誠三「オルテスの経済思想」[14]があり, いずれも貴重な貢献である。以後の研究においてはこれらの先達の成果に依拠して, 論を進めていきたい¹⁾。

¹⁾ オルテスの経済理論についての先行研究について

II オルテスの経歴とヴェネツィア共和国

ジャンマリア・オルテス (Giammaria Ortes) について一般に流布している情報は、1713年ヴェネツィア生まれの修道僧で思想家、人口論でマルサスの先駆者、1790年没、という程度のものである。これはオルテスの経歴が不詳だからではなく、オルテスが学者によってまともに研究されてこなかったためであろう。不思議なことに、オルテスの研究はアマチュアの研究者によって細々と行われてきた。例えば、ブスケーが「無駄話が非常に多いように思えた」[3, p.15] と評した、ヴィチェンツァの評議員であったランペルティコ (Fedele Lampertico, 13.6.1833-6.4.1906) の著作 [31, pp.26-34] では、1713年3月2日ヴェネツィアのガラス細工 (模造真珠) 職人の家に生まれ、1727年11月23日ムラーノ島のサン・マッティア修道院に入り、1734年9月18日ピサのサン・ミケーレ修道院に移り、幾何学者グランディ (Luigi Guido Grtandi, 1.10.1671-4.7.1742) に師事、1743年5月6日僧籍離脱、1790年7月22日没、ヴェネツィアのサン・ミケーレ島に埋葬された旨がはっきりと書かれている²⁾。この記述は、やはりアマチュアのオルテス研究者で、ヴェネツィアの検事であったチコーニャ (Emanuele Antonio Cicogna, 17.1.1789-22.2.1868) が収集したオルテスの手稿の中にある「日記」[25] がもとになっている³⁾。

は、オルテスの著作を検討した後に、改めて述べたい。

- ²⁾ したがって、たぶん、ブスケーはランペルティコを読んでいない、あるいは少なくとも生没年月日には興味がないと思われる。しかし、ブスケーの著作 [3] においては、ガリアーニとフランチェスコ・フェッラーラの生没年月日は示されている。
- ³⁾ トルチェッラン [42, p.728] によれば、この「日記」はヴェネツィアのサン・マルコ広場に面したコッレール美術館に併設されたコッレール図書館に (チコーニャが収集した書籍4万点、手稿5千点 [28, p.395] とともに) 保存されているということであるが、ベルガモ [27] によって公刊されている (ミラノ大学法学

このように、オルテスは元修道僧であり、修道院に入ったのも、「自由七科」と呼ばれる当時の教養人の必須科目である文系三科目 (文法、弁証、修辞) と理系四科目 (算術、幾何、天文、音楽)、特に幾何学を学びたいがためであった⁴⁾。僧籍を離脱したのは師であるグランディが亡くなったからであり⁵⁾、修道院に入る前に修めた文系三科目、僧籍離脱後は残りの理系三科目を勉強している。ランペルティコは「彼自身決してしぶしぶではなく修道院を退去したとわれわれに言った」[31, p.28] と記していることから、オルテスは必ずしも敬虔なカトリック信者ではなかったようである。

まず指摘しておきたいのは、15年半の修道僧時代のオルテスはおそらく幾何学を研究していたということである。当然のことながら、当時の幾何学はユークリッドが『原論』で提示した五つの公理と五つの公準に基づくユークリッド幾何学である⁶⁾。オルテスは理系の人であった⁷⁾。

部図書館で閲覧可能である)。

- ⁴⁾ ヴェネツィアの貴族の間では「贅沢な生活を維持するため、どうしても家族規模を制限しなければならなかった」ので「兄弟のうち誰か一人だけが結婚して……他は独身のままか修道院に入る」[21, p.133] ということがあったらしい。オルテス家が貴族または金を払って加入を許された新貴族であったかどうかはわからないが、オルテスにはマウロという兄弟がいる。貴族でなくても、「生活を維持するため、どうしても家族規模を制限しなければならなかった」ということはありうる。
- ⁵⁾ モラート [34, p.177] によれば、オルテスが書いたグランディの追悼論文 [35] の前に1738年にソネット (十六行詩) の著作があるということであるが、公刊された著作としてはグランディに関するものが最初であると思われる。
- ⁶⁾ エウクレイデス (ユークリッド) の『原論』と比較してみれば、オルテスの1771年の著作は『原論』の形式を踏襲しているのは明らかである。
- ⁷⁾ ブスケーは「一般にオルテスは数理経済学体系の樹立者であると主張されてきた。しかしこの主張はまったく支持しがたい。オルテスが数学的推理を援用する個所などどこにもないし、またオルテスの文章中にごくまれに出てくる〔数学〕公式は無意味である」[3, p.115] と言うが、パレートの『経済学提要』の本文

次に指摘しておきたいのは、今ではイタリアの一地方都市にすぎないヴェネツィアは1790年に崩壊するとは言え、当時、内陸はオーストリア近くからギリシャのペロポネソス半島までの広い領土を持ち、地中海貿易を支配した強大な共和国であったということである。内陸部では大規模な毛織物業が盛んで、16世紀から続く印刷・出版業が一大産業になっていた⁸⁾。中近東と西欧を結ぶ中継貿易の一大拠点であるところから、文字通り文物の集積地であったヴェネツィアは、印刷・出版を通じた情報の一大発信地でもあった。オルテスの著作には、アダム・スミスの『諸国民の富』の書き出しと似たような表現もあるし、興味深い表題の『快樂と苦痛の計算』という著作もあるので、イタリアへのイギリス経済文献の流入もさることながら、その逆の可能性も否定できないように思われる⁹⁾。控え目に言っても、イギリスのアダム・スミスあるいはアダム・スミスのイギリスに匹敵するほどのプレゼンスがオルテスとヴェネツィアにはあるように思われる。

III 底本の確定

さて、オルテスの経済学に関する著作のうち、主要なものは、匿名で出版された1771年の『国

民経済学に関する俗論の誤り、財産の所有に関する俗人と聖職者の間の現下の論争についての考察 *Errori popolari intorno all'economia nazionale, Considerati sulle presenti controversie fra i laici e i chierici, in ordine al possedimento de'beni*』(以後『俗論の誤り』)と1774年の『国民経済学について、第一部、六篇 *Della economia nazionale parte prima libri sei*』(以後『国民経済学』)である¹⁰⁾。邦語の表題は先行研究によるものであるが、ここで、「国民経済学」と訳されている *economia nazionale* について少し述べておきたい。まず、「経済学」と訳されている *economia* には他に「経済」や「節約」の意味もあるので、これが科学の一分野としての「経済学」の意味であるのか。次に、「国民」と訳されている形容詞 *nazionale* はどこの国のことを意味しているのか。イタリアは1861年まで統一されていないので、オルテスの住んでいるヴェネツィア共和国のことであろうか。もしそうであるならば、*economia nazionale* はヴェネツィア共和国の経済(節約)を論じているのでであろうか。もちろんそうではない。オルテスの経歴から言っても、例えば、『俗論の誤り』の序文の冒頭を見ても、*economia* は科学としての経済学の意味であるし¹¹⁾、僧籍離脱後のオルテスが英仏独を何度も外

には数学公式はほとんど出て来ないけれども、パレートは数理経済学者と呼んで差し支えないであろう。一方、スラッファの『商品による商品の生産』には多くの数学公式が出てくるけれども、果たしてスラッファは数理経済学者と呼んでも差し支えないのであろうか。しかし、スラッファには「数学的推理を援用する箇所」はある(例えば、標準商品の一義性の証明など)。

8) ヴェネツィアの印刷・出版業の歴史を扱ったものがマーニョ[19]である。フィクションではあるがブルックス[4]の中にヴェネツィアの出版の様子を描写したところがある。

9) いわゆるトンデモ本の中には、マルサスの人口論はオルテスを剽窃したとしているものもある。このような誹謗中傷は、もしオルテスが取るに足らない人物であったならばマルサスに何の痛みも与えないであろうが、もしそれが効果あるものであるならば、オルテスはそういう人物ではないということになる。

10) 二つの著作がオルテスによるものとしたのはメルツイ[33, pp.369, 341]である。これは16世紀から18世紀にかけて出版された匿名の著作の著者を同定したものであり、これ以後、二つの著作がオルテスによるものとなった。(以下の註¹²⁾も参照されたい。)

11) 本稿冒頭で述べた「イタリア近代経済学の伝統」をオルテスにまで拡張しようとする際に懸念があったのは、上述の①がオルテスにあるのかどうかということであったが、『俗論の誤り』の序文では、経済学と物理学を対照させて論じているので、これは杞憂であった。オルテスは1200年以降の物理学の暗黒時代が幾何学によって建て直されたように、経済学も幾何学によって整理しようとしている(なぜ幾何学が経済学と関係するのかと言えば、もともと幾何学 *geometria* は土地 *geo* を測量する *metria* 「測地学」であるから、経済学と同様に量を扱うからだオルテスと言う)。これはまさにスコットランドの海洋生物学

遊していることから見ても、nazionaleはヴェネツィア共和国一国のことではなく、まして時間的に後になる『国民経済学』概念をドイツから輸入した[13, p.33]ものでもなく、アダム・スミスの『諸国民の富』の「諸国民」と同じ意味であろう。したがって、economia nazionaleは先行研究の翻訳どおり「国民経済学」で問題はないと思われる。

次に、経済学史研究の基本である両著作の底本を確定しなければならない。『俗論の誤り』はイタリア・ピエモンテ州のガッリアーテ生まれの男爵ピエトロ・クストディ(Pietro Custodi, 29.11.1771-15.5.1842)のコレクションをもとにした『イタリア古典経済学者叢書』に収録されている1804年のもの(以下「クストディ版」)[36]¹²⁾と1976年にフォルニ社から復刻されたもの(以下「フォルニ版」)[40]、それにフランコ・ロンゴニが注釈を加えたもの(以下「ロンゴニ版」)[37]が筆者の見たとこ現在入手可能なものである。三者を比較してみると、後二者は記述はほぼ同じであるが、ページ数は異なっている。前二者はページ数だけでなく、綴りにかなりの違いがあるし、明白な誤りは別にして、異なる語を用いている箇所も少なからず見られる。クストディ版はフォルニ版の18世紀のイタリア語を19世紀のイタリア語に改めているばかりではなく、綴り方、特にフォ

ルニ版で多用されるセミコロンをほぼ全体的に廃し、コロンに改めている。つまり、フォルニ版を旧字旧かなとすれば、クストディ版は新字新かなのように見える¹³⁾。問題はどれが原本に忠実であるのかということである。ロンゴニ版は新字新かなに改めているほかに、ロンゴニ自身の解釈が取り入れられており、挿入句とみなされる部分はカッコでくくるなどして、読みやすくなるように工夫がなされている¹⁴⁾。ただし、原本にある改行がなされていないなど、細かな部分で原本と異なる箇所がある。

『国民経済学』については、1804年のクストディ版[36]と、1976年のフォルニ版に収録されているもののほかに、ブスケーが「原書」[3, p.7]とする1852年の『経済学者叢書』に収録されたもの(以下「経済学者叢書版」)[39]¹⁵⁾がある。

¹³⁾ ここで「旧字旧かな」と「新字新かな」と表現したのは、例えば、オルテスは「s」を「[]」としているとか、「原理 principio」の複数形「principi」を「principj」または「principii」とするとかいった表記上のことである。パンタレオーニの1890年の『純粹経済学原理 Principii di economia pura』では「principii」が用いられている。パローネの『経済学原理』では1908年の初版では「principii」であったが1913年の二版では「principi」である。

¹⁴⁾ オルテスの文章は非常に読みにくい。もちろん筆者の語学力の未熟さもあるのだが、同じラテン語系のブスケーも「オルテスは、その根本思想においても、かつまたこの思想を述べるその表現法においても、さらには彼の用いる言葉自体に至るまでも、難解であるところの、ほぼただ1人のイタリア人著者である」[3, p.115]と述べているし、イタリア人のロンゴニが単語の意味や文章の意味するところについて注釈を付けているのを見て、少しばかり安心した。オルテスの文章は、文章自体が非常に長いばかりでなく、代名詞が多用されているので、それらが何を指しているのかわかりづらい。それらの代名詞はかなり前まで戻らないと特定できないことがよくある。また、対句表現のような繰り返しが多いので、わからない単語が出てきても、同じ意味とすることができるから、その分助かるのではあるが、それにしても文章が長い。

¹⁵⁾ 『経済学者叢書 Biblioteca dell' economista』第一部第三巻は立教大学池袋図書館の貴重書を閲覧させていただいた。

者パトリック・ゲディスがダーウィンの『種の起源』の後、当時最先端の生物学によって経済学を体系化しようとしたのによく似ている。しかし、ゲディスがやはり同じ海洋生物学者ダーウィンを生物学ではなく経済学で超えようとする野心を持っていたのに対し、オルテスにはそのような野心があったようには見えないところが違っている。いずれにしても、異分野の著者による経済学の著作をパンタレオーニが参照・引用しているのは興味深い。(ゲディスについては拙稿[7]と[8]を参照されたい。)

¹²⁾ 不思議なことに、クストディ版の『俗論の誤り』と『国民経済学』の表紙にはオルテスの名前が挙げられている。クストディはメルツィ以前に二つの著作がオルテスによるものであることを知っていたことになる。

これは新字新かなに改められているものの、側注が本文中にカッコ書きにされている以外は原本には忠実である¹⁶⁾。これに対しクストディ版では新字新かなに中途半端に改められ、部分的に旧字旧かなのままになっている箇所がある。『俗論の誤り』と同様に、やはりクストディ版とフォルニ版とでは少なからぬ相違がある。したがってやはり原本と比較しなければならない。(結論から言えば、フォルニ版は原本のファクシミリ版なのであるが、それでも少しばかり原本と違うところがある¹⁷⁾。)

イタリアのICCU (Istituto centrale per il catalogo unico) の図書館総合目録によれば、『俗論の誤り』と『国民経済学』を両方とも所蔵しているのは、アヴェッリーノの県立図書館 (Biblioteca provinciale Scipione e Giulio Capone di Avellino)、ボローニャの公立図書館 (Biblioteca d' arte e di storia di San Giorgio in Poggiale di Bologna)、ファエンツァの市立図書館 (Biblioteca

comunale Manfrediana di Faenza)、フィレンツェの国立中央図書館 (Biblioteca nazionale centrale di Firenze) である。このうち、ICCU の目録によれば、ボローニャ・ファエンツァ・フィレンツェのものは二冊を合本 (consistenza) にしたものである。いずれも表紙を含めて、縦約 260mm、横約 210mm、厚さ約 50mm である。印刷部分は、見開きにしたとき、全体的に中央上部に寄っていて、閉じてある「のど」の方の余白よりも外側の「小口」の方の余白が大きく、上方の余白よりも下方の余白が大きい¹⁸⁾。内容はフォルニ版と同じであり、クストディ版のように注が脚注ではなく、また『経済学者叢書』版のように本文中にカッコ書きになっているのではなく、側注になっている。ただし、フォルニ版のサイズは約 248mm × 171mm であるので、原本の小口側と下側をカットしてある。全体の印象は、原本はフォルニ版と比べて鮮明であり、活字の潰れもない¹⁹⁾。

アヴェッリーノのものは、目録とは異なり合本であった。しかし特筆したいのはそのサイズであり、表紙を含めて、縦約 274mm、横約 214mm、厚さ約 52mm、表紙を除いた 1 ページのサイズは縦約 268mm、横約 210mm で他のものよりも大きい。これは恐らく他のものは合本に際して上下と小口側を若干カットしてあるのに対して、アヴェッリーノのものはほとんどカットされなかったためと思われる。実際、アヴェッリーノのものは、紙を漉いたときの端の不揃いがそのままになっていて、小口側の縁が 1 cm 程度欠けている

¹⁶⁾ 例えば、先の「principio」の複数形は「principi」になっているが、旧字を新字にしている以外は、綴り方は原本に忠実である。クストディ版の『国民経済学』は「principj」となっている。ブスケーはクストディ全集について「文体の面で、この編者はこれらの原書に手を加えている」[3, p.2] と書いているが、『俗人の誤り』と『国民経済学』に関して言えば、それぞれの編集の仕方 (旧字旧かなを新字新かなに改めたり、綴りを改めるといった) には微妙な違いがあり、同一の編集者 (クストディ) によるものではないと思われる。オルテスの原本の側注を脚注にしたり、表題を変えたりしているところから、クストディ版は底本とすることはできないように思われる。ブスケーは経済学者叢書版を「原書」として参照したにもかかわらず、引用しているのはクストディ版からであり、オリジナルは参照していないようである。オリジナルを参照せずにオルテスに文句を言っているのはあまり公正な態度とは思えない。クストディのコレクションはパリの国立図書館にあるそうなので [29, p.525]、ブスケーには閲覧するチャンスはいくらでもあったはずである。

¹⁷⁾ 以下で見るように、フォルニ版はクォート判 (4°) の余白をカットしたものである。

¹⁸⁾ フィレンツェでは原本が現在電子化の作業中であったので、閲覧はできなかった。その代わりに *Opuscoli raccolti dell'abate Domenico Capretta di Ceneda* の第 28 巻に、他の著者ともに収録されている『俗論の誤り』の原本を閲覧した。他の著作との合本の際に余白が少しカットされている (約 252mm × 182mm)。

¹⁹⁾ 今回閲覧した原本は、いずれも活字が美しく鮮明であり、ページ上には活字だけでなく組版の枠の跡まで確認できた。フォルニ版のもとになった原本はなぜか非常にきたない。

ページもある。そのためか、ページの余白は他のものよりも、小口側で12mm程度、上部が3mm程度、下部が10mm程度広くなっている。したがって、このアヴェッリーノのものが本来のオリジナルのサイズに最も近いように思われる。ただし、惜しむらくは『国民経済学』に乱丁があり、本文のpp.1-8が序文のp.viiiとp.ixの間に入っているが、これはこれで当時の製本の様子を物語る貴重な資料である。ICCUの目録では1771年の『俗論の誤り』を所蔵している図書館はまだ3館あり、次の機会に同じクォート判とされている『国民経済学』とのサイズ比べをしてみたい。

以上のことから、『俗論の誤り』と『国民経済学』を検討するに当たったの底本としては、余白がカットされて復刻されたフォルニ版を用いることにする。

IV むすびにかえて

ジャンマリア・オルテスの著作の検討に当たって、経済学史研究の基本から始めてみた。オルテスについて調べれば調べるほど多才な人であったことがわかる。ゲディスのように経済学を生物学によって体系化して名を挙げようという野心もなく、オルテスは単に学問的な興味から幾何学によって経済学を整理しただけであり、オルテスの関心は経済学にとどまらなかった。自由七科を深めようとした教養人であり、父親に連れられて就職活動をしていた13歳のモーツァルトを、当時の人気作曲家ヨハン・アードルフ・ハッセに代わってヴェネツィアを案内したのはオルテスである²⁰⁾。詩作にも秀で、ソネットの著作もある。こ

うした多方面の才能を披露し、名士と称えられていたそうであるが、それにもかかわらず今日ほとんど顧みられないのは、ランペルティコによれば、あまりにもずけずけと物を言うので人から嫌われていたせいかもしれない。そのために不当に無視され続けたのかもしれない。しかしそれでも、クストディ全集50巻のうちオルテスは単独のもので7巻、他の著者との合本が1巻を占めているし、オルテスとは生没年がほとんど重ならないチコーニャは、とりわけ妻を亡くしてから多くのオルテスの著作・手稿を収集している。アマチュアの研究者には興味を起こさせる何かがあったのであろう。

いずれにしても、そのように毀誉褒貶の激しいオルテスを、これまで見てきたスラッフアからパンタレオーニにさかのぼるイタリア経済学の構造と関連させて、先行研究に何か加えるところがあれば望外の幸せである。

Benevento, 5. 9. 2013

参考文献

- [1] 朝倉文市、『修道院にみるヨーロッパの心』、山川出版社世界史リブレット、1996年4月。
- [2] クリスチャン・ベック（仙北谷茅戸訳）、『ヴェネツィア史』、白水社文庫クセジュ、2000年3月。
- [3] G.H. ブスケー（橋本比登志訳）、『イタリア経済学抄史——発端よりフランチェスコ・フェッラーラまで——』、嵯峨野書院、1976年12月。
- [4] ジェラルディン・ブルックス（森嶋マリ訳）、『古書の来歴』、RHブックス・プラス、2012年4月。
- [5] 『エウクレイデス全集』第1巻『原論』I-VI（斎藤

²⁰⁾ 『反音楽史』[15]によれば、現在クラシック音楽と言えばドイツの楽曲を指すが、これは比較的最近、19世紀になってからのドイツの猛烈な宣伝によって浸透させられたもので、少しも「クラシック」ではなく、17世紀からドイツの宣伝に至るまでの世界の支配的な音楽はイタリア音楽であった。その証拠に、いくらバッハだ、ベートーヴェンだと言っても、使用されている音楽用語はほとんどすべてがイタリア語であ

る。イタリア音楽の中でも最も有名な作曲家は、イタリア人よりもイタリア人らしい音楽を作曲したドイツ人のハッセであった。モーツァルトの父親がイタリアでも就職活動をするためにハッセに手紙を書き、イタリアで便宜を払うように頼んだのも当然のことであった。しかしハッセは多忙を理由にその役目をオルテスに依頼した。それは『俗論の誤り』の出版の前、1769年のことであった。ハッセとオルテスの大量の書簡が公刊されている[41]。

- 憲・三浦伸夫訳・解説), 東京大学出版会, 2008年1月.
- [6] 『ユークリッド原論』[追補版] (中村幸四郎・寺阪英孝・伊東俊太郎・池田美恵訳・解説), 共立出版, 2011年5月.
- [7] 藤井盛夫, 「バトリック・ゲディス『経済学原理の分析』について」, 『経済集志』第77巻第2号, 2007年7月, pp.13-25.
- [8] 藤井盛夫, 「パンタレオーニとゲディス」, 『経済集志』第77巻第3号, 2007年10月, pp.53-71.
- [9] 藤井盛夫, 「スラッファ vs. パンタレオーニ——スラッファはパンタレオーニをどのように読んだのか——」, 『経済集志』第79巻第4号, 2010年1月, pp.147-156.
- [10] 藤井盛夫, 「スラッファ vs. パレート——スラッファはパレートをどのように読んだのか——」, 『経済集志』第80巻第1号, 2010年4月, pp.43-58.
- [11] 藤井盛夫, 「スラッファ vs. バローネ——スラッファはバローネをどのように読んだのか——」, 『経済集志』第80巻第2号, 2010年7月, pp.73-80.
- [12] 藤井盛夫, 「バローネ『経済学原理』各版の異同について」, 『経済集志』第80巻第3号, 2010年10月, pp.117-142.
- [13] 堀 経夫監修, 『経済思想史辞典』, 創元社, 1951年12月.
- [14] 堀田誠三, 「オルテスの経済思想」, 永井義雄・柳田芳伸・中澤信彦編『マルサス理論の歴史的形成』所収, 昭和堂, 2003年6月, pp. 3-26.
- [15] 石井 宏, 『反音楽史——さらばベートーヴェン——』, 新潮文庫, 2010年10月.
- [16] 経済学史学会編, 『経済思想史辞典』, 丸善, 2000年6月.
- [17] 北村暁夫・伊藤 武編著, 『近代イタリアの歴史——16世紀から現代まで——』, ミネルヴァ書房, 2012年10月.
- [18] 小林 昇編, 『経済学史小辞典』, 学生社, 1963年6月.
- [19] アレッサンドロ・マルツォ・マーニョ (清水由貴子訳), 『そのとき, 本が生まれた』, 柏書房, 2013年4月.
- [20] 松本佐保, 『パチカン近現代史——ローマ教皇たちの「近代」との格闘——』, 中公新書, 2013年6月.
- [21] 永井三明, 『ヴェネツィアの歴史——共和国の残照——』, 刀水書房, 2004年5月.
- [22] 岡田温司, 『グランドツアー——18世紀イタリアへの旅——』, 岩波新書, 2010年9月.
- [23] 竹内 均, 『物理学の歴史』, 講談社学術文庫, 1987年9月.
- [24] 矢野健太郎, 『幾何学の歴史』, NHKブックス, 1972年12月.
- [25] AA. VV., *Giammaria Ortes: Un 'filosofo' veneziano del settecento*, Leo S. Olschiki editore, 1993.
- [26] Alessandro Aspesi, *Pietro Custodi (L'uomo - lo scrittore - il patriota e il poitico)*, Gastaldi editore, 1954.
- [27] B. Bergamo, *Trattatelli inediti di Giammaria Ortes veneziano celebre scrittore economista*, Portogruaro, 1853.
- [28] Istituto della enciclopedia italiana, *Dizionario biografico degli italiani*, XXV Chinzer - Cirini, 1981.
- [29] Istituto della enciclopedia italiana, *Dizionario biografico degli italiani*, XXXI Cristaldi - Dalla Nave, 1985.
- [30] Istituto della enciclopedia italiana, *Dizionario biografico degli italiani*, LXIII Labroca - Laterza, 2004.
- [31] Fedele Lampertico, *Giammaria Ortes e la scienza economica al suo tempo, studi storici economici*, G. Antonelli e L. Basadonna edit., 1865.
- [32] Terenzio Maccabelli ed Erica Morato, "Il «bisognevole» e il «superfluo»: occupazioni e distribuzione della ricchezza in Giammaria Ortes", *Quaderni storici*, N.105 - AnnoXXXV - Fascicolo3 - Dicembre 2000, pp.731-766.
- [33] Gaetano Melzi, *Dizionario di opere anonime e pseudonime di scrittori italiani: o come che sia aventi relazione all'italia*, Tomo I, Giacomo Pirola, 1848.
- [34] Erica Morato, *L'economia nazionale di G. M. Ortes nei rapporti tra stato e chiesa*, Giuffrè, 1998.
- [35] Giammaria Ortes, *Vita Del Padre D. Guido Grandi, Abate Camaldolese, Matematico dello Studio Pisano, Scritta da un suo Discepolo*,

Giambatista Pasquali, 1744.

[36] Giammaria Ortes, *Errori popolari intorno all'economia nazionale, Considerati sulle presenti controversie tra i laici e i chierici, in ordine al possedimento de'beni*, in *Scrittori classici italiani di economia politica*, Parte moderna, Tomo XXV, 1804.

[37] Giammaria Ortes, *Errori popolari intorno all'economia nazionale e al governo delle nazioni*, a cura di Franco Longoni, Riccardo Ricciardi editore, 1999.

[38] Giammaria Ortes, *Della economia nazionale libri sei*, in *Scrittori classici italiani di economia politica*,

Parte moderna, Tomi XXI-XXIII, 1804.

[39] Giammaria Ortes, *Dell'economia nazionale*, in *Biblioteca dell'economista*, Serie I III, pp.783-1019, 1852.

[40] Giammaria Ortes, *L'economia nazionale*, Arnaldo Forni editore, 1976.

[41] Livia Pancino (edizione e commento), *Johann Adolf Hasse e Giammaria Ortes: Lettere (1760-1783)*, Brepols, 1998.

[42] Gianfranco Torcellan, "Un economista settecento: Giammaria Ortes", *Rivista storica italiana*, Anno LXXXV - Fascicolo IV, Dicembre 1963, pp.728-777.